

琉球文化財研究室

幸喜 淳¹

キーワード：首里城再建 被災文化財修理 復元製作 琉球染織調査 琉球食文化研究 漆塗装技術 古瓦製作・瓦葺き
伝承者養成事業 受託業務（文化財修復・展示） 普及啓発（講演・展示）

1. はじめに

琉球文化財研究室は、首里城に関する資料収集、調査研究、技術開発及び普及啓発を行うとともに、首里城公園管理部が維持管理を行う首里城公園の利用促進につながる活動を推進する。

主な事業としては、調査研究業務と受託業務、普及啓発業務を実施している。地域貢献として大学への講師派遣を行い、首里城の歴史文化を普及啓発した。

令和元年 10 月 31 日、首里城は火災によって正殿をはじめ、南殿・番所、書院・鎖之間、黄金御殿、寄満、北殿等の建造物の他、美術工芸品の一部が焼失した。正殿の再建については、令和 8 年度の完成に向けて、進められているが、被災した美術工芸品の修理は、令和 3 年度より開始し、修理可能な点数の少ない染織、絵画については、昨年度までに終了し、令和 6 年度は、漆器・陶器の修理を行った。加えて、焼失あるいは劣化により活用が困難となった資料について、模造復元事業を実施し、染織・書跡についての製作を開始した。

また財団として収蔵施設及び修理室の整備を行った。

2. 実施体制

琉球文化財研究室内の令和 6(2024)年度の体制は、正職員 5 名、フルタイム専門職員 2 名、補助職員 1 名の合計 8 名体制であった。

主な担当は以下のとおりである。

- ・正職員（5 名）
漆塗装担当 1 名、人材育成担当 1 名、染織担当 1 名、食文化担当 1 名、書跡・絵画・陶磁器担当 1 名
- ・フルタイム専門職員（2 名）
漆器修理担当 1 名、文化庁事業人材育成 1 名
- ・補助職員（1 名）
漆器修理補助担当 1 名

3. 実施内容

1) 琉球食文化に関する調査研究

琉球料理「美栄」の料理についての記録は田イモの唐揚げなどを実施したほか、1950 年代の新聞

より食文化関連の記事や広告を収集し、それらの情報を琉球料理保存会にて発表を行った。

また文化庁より「食文化ストーリー事業」の補助事業の採択を受け、琉球・沖縄についての島野菜アンケート調査や旧盆の行事食、琉球料理に関連する文献調査を行った。調査については、それぞれの研究者や琉球料理ユネスコ無形文化遺産登録推進委員会と協力し実施し、調査結果報告書を作成した。

2) 収蔵品修理事業

財団所蔵絵画資料のうち、毛長禧の花鳥図(鷹雀枯木芙蓉図)の修理を行った。解体修理を行い、従来表装裂にて隠れていた部分についても見えるように裂の調整を実施した。

首里城火災により被災した漆器の修理では、12 件の修理を開始し、7 件を完了、5 件は次年度以降に継続する。また陶器では、最後の 1 点の修理を完了した。

加えて、修理作業が長期に渡るため、沖縄県内にて修理技術者の人材育成を開始し、修理技術者を招いた勉強会を複数回実施した。

3) 琉球・沖縄の染織資料に関する調査研究業務

琉球王国時代における首里王府の正装である黒朝衣の復元製作に向け、宮古市総合博物館において黒朝衣資料の調査を実施し、佐賀大学において関連試験を行った。

また、令和 6 年 1 月 15 日に刊行した書籍『科学の目でみる琉球王国の色とその色材～国宝・琉球国王尚家伝世品をはじめとする琉球・沖縄の染織品を中心に～』に関する講演会を開催した。100 名を超える参加者が集まり、本研究成果に対する高い関心がうかがえた。

4) 漆塗装検討業務

琉球産弁柄について、名護市久志集落にて製造タンクを整備し製造を開始した。弁柄の採取量や品質の安定化に向け、採取量増加の試験を引き続き実施した。

また正殿での塗装については、久志間切弁柄(BIOX 弁柄)と弁柄メーカーと共同で作成した色合わせ工業用弁柄を 1:1 で混ぜて使用される事が決定したため、試作手板を作成した。

¹ 琉球文化財研究室 室長

耐候性試験では、実際に正殿にて外壁塗装に使用される久志間切弁柄、久米赤土について、試験を実施した。

さらに久志間切弁柄は、首里城正殿塗装用材料として、国営沖縄記念公園事務所へ 20 kg の提供を行った。

今後は久志区へ本格製造設備での製造安定化を目指し、バクテリア生息環境の設定や大量採取方法について試験を実施し、首里城正殿塗装へ残りの弁柄供給を行う。

5) 祭祀等に関する調査

琉球楽器については、研究顧問が実施の琉球楽器音階調査に協力し、復元楽器を用いた演奏に向けて、楽器演奏家を集めた勉強会を実施した。また琉球楽器一式の演奏に向けた調律作業を行い、「夜雨琴」については、県内楽器店の協力を得て修繕を行った。

6) 受託業務

(1) 琉球王国文化遺産集積・再興事業 実施設計業務

沖縄県立博物館・美術館より受託した琉球王国文化遺産集積・再興事業 実施設計業務において、当財団と株式会社 国建の 2 社による共同企業体を組織し、業務を実施した。

今年度は、模造復元製作に関する 8 分野 35 点の調査および試作検討、SNS 等を活用した事業 PR、新デザインロゴの作成と発信イベントの実施などを行った。また、それらの調整および資料作成を行い、最終的に「業務完了報告書」等の成果品を納品した。

(2) 首里城復興基金事業 製作検討業務

株式会社国建より受託した首里城復興基金事業において、垂飾（瓔珞）に関する製作業務を担当し、製作仕様の検討、試作・製作調整、および製作管理・監修を行った。

(3) 手機製作記録刊行事業 編集検討業務

南風原町の大城義政氏（大城機製作所代表）より受託した、文化庁補助事業である。これまでに収集したヒアリング調査や映像記録をもとに、報告書および映像 DVD を制作した。

以上、これらの受託業務を通じて得られた成果は、今後の首里城公園の展示や文化財の保護・活用に資することが期待される。

7) 伝承者養成事業

昨年度からの継続で、文化庁からの助成により琉球建造物漆塗り及び琉球赤瓦製造について技術者養成事業を行った。関連する各分野の専門家を招いた座学及び実習を実施した。塗装分野では、初級コースと上級コースを設定、初級コース 4 名、上級コース 4 名で実習を行った。瓦製造分野では 5 名、瓦葺き分野では 4 名の研修生を受け入れ、実習を行った。県外実習では、漆分野では日光へ、瓦製造、瓦葺き分野では、奈良において現場視察を行った。瓦製造では、個人選定として「八幡昇」氏、

団体選定として「琉球瓦葺技術保存会」が国選定保存技術として文化庁より認定を受ける成果があった。

8) 普及啓発事業

美術工芸品コレクターである桃原用昇氏より寄託を受けた染織品コレクションについて、昨年度の沖縄県立博物館・美術館に続き、石垣市主催による「沖縄の染と織の至宝－桃原用昇コレクション展」の開催へ協力を行った。4,200 人を超える入館者があり、好評であった。

また沖縄県立博物館・美術館のホワイエを活用し。「首里城被災美術工芸品修理・復元パネル展」を開催した。

4. 外部評価委員会

今年度の事業概要の報告及び課題管理シート 14 件に対し、研究顧問 4 名より以下の評価をいただいた。

【研究顧問】

- 高良倉吉氏（座長・琉球大学名誉教授）
- 西大八重子氏（生活文化研究所西大学院院長）
- 安次富順子氏（安次富順子食文化研究所所長）
- 宮里正子氏（元浦添市美術館館長）
- * 喜名盛昭氏（中国民族音楽研究家）は、一身上のご都合により 2024 年 12 月辞任。

1) 評価すべき点について

(1) 漆塗装関連調査

- 研究成果が首里城正殿での復元事業に活用された。科学的な調査を通じた塗装技法の再現が進展した。

(2) 琉球染織資料の調査研究

- 科学調査と復元製作を組み合わせた研究手法を確立した。
- 黒朝衣の復元技術研究および琉球古刺繍の製作が進展。
- 国際会議（中国雲南省）での発表など、国際的な発信。

(3) 琉球食文化の調査研究

- 「食文化ストーリー」を通じ、琉球食文化の研究活動が進展した。
- 1950 年代の食文化に関する新聞記事や農産物の「産地訪問バスツアー」の知見を蓄積した。

(4) 被災資料調査・修繕・複製品製作

- 科学分析に基づく修理・復元製作が進行していることは良い。
- 漆器や陶磁器の修理、染織や書跡の復元製作が順調に進行している。
- 修理技術者の育成を兼ねたワークショップを実施されたことは良い。

(5) 沖縄県立博物館・美術館別途受託業務 琉球王

国文化遺産集積・再興事業

- ・沖縄県立博物館・美術館の受託業務を通じ、文化財の保護・技術継承に寄与している。

(6) 漆塗・琉球赤瓦製作施工文化財保存技術(伝承)事業

- ・文化庁助成事業「琉球建造物塗装及び古瓦製造伝承者養成事業」が順調に進行し、古瓦製造実習講師が選定技術の個人認定、瓦葺きの実習講師と受講生らで発足した琉球瓦葺技術保存会が選定保存技術の団体認定されたことも大きな成果である。

(7) 研究成果の発信

- ・書籍刊行記念講演会、パネル展、オンライン展示等を開催したことは良かった。

また火災で被災した美術工芸品の修理・復元計画については以前より提言されており、今後も適切な実施が求められる。特に、修理については正殿の再建後も長期にわたって継続されるため、修理業務に関わる人材の育成も重要な課題である。このため、令和 6 年度より修理室の整備が行われ、令和 7 年度からは、財団における修理業務が本格的に開始される。

本事業の円滑な推進とともに、首里・沖縄地域の文化の保全・継承、産業振興に貢献することを目指す。

また、沖縄県立博物館・美術館が実施する委託事業「琉球王国文化遺産集積・再興事業 復元製作業務」において、令和 7 年度から本格的な復元製作が開始される。当財団がこれまでに培ってきた科学調査および復元製作研究のノウハウを活かし、より効果的な事業展開を進めることが求められる。

2) 見直すべき点について

(1) 琉球食文化の調査研究

- ・琉球王国時代の饗宴料理の再現が未実施。首里城正殿の完成に向けて、再現プロジェクトの推進が求められる。

(2) 人材不足と組織強化

- ・琉球音楽・食文化研究などで、担当者が不足。研究継続のための人材確保が急務である。

(3) 研究成果の発信と共有

- ・広報活動が限定的。学会発表や国内外の研究機関との連携強化と情報発信の拡充が求められる。
- ・SNS・ホームページの活用により、広報活動をより強化するべき。

5. 今後の課題

琉球文化財研究室における調査研究事業には、①首里城公園機能の向上、②文化環境の保全・継承、③首里・沖縄地域の文化・産業振興、④当財団の発展の 4 つの目的が挙げられる。

令和元年の首里城火災から、令和 8 年には首里城正殿の再建が完了し、同年度から新たな指定管理業務が開始される。そのため、企画提案に関する調査研究が必要となる。

このような状況を鑑み、首里城公園正殿の展示機能の向上と当財団の発展に関する調査研究を最優先課題とし、これを踏まえた事業推進が求められる。

首里城の再建・復元事業は国・沖縄県によって進められており、正殿などの建築物の漆塗装に使用される琉球産弁柄の開発や、定期修繕に向けた長寿命化、首里城正殿瓔珞(ようらく)などの復元製作が遅滞なく進められる必要がある。さらに、琉球王国時代の正殿内における調度類の調査研究を行うことで、展示の充実を図る。